

東京研修は、準備を重ねただけあり、非常に楽しみにしていた行事の一つだった。

いよいよその東京研修が始まり、新幹線に乗り込んだ。ただの修学旅行であれば、盛大に遊んでいただろう。しかしこれは東京研修。「知的に楽しむ」という最大の目的を強く意識し、電車の中でも班内で、綿密に研究所訪問に向けて打ち合わせを行った。

私達が訪問したのは、医科学研究所の中の、感染遺伝学分野を専門にしている研究室だった。いざそこに着き、インターホンを押すと、教授がおいでになり、早速ゲノム解析を行うスーパーコンピューターを見せてくださった。お話を伺うと、スーパーコンピューターは、計算でかなりの発熱をし、それを冷やすために、計算に必要な電力と同じだけの電力を必要とするそうだ。そのため、電気代には、かなり気を遣っていると教授はおっしゃっていた。研究者には、節約する能力も必要だということも学んだ。私達は特別にスーパーコンピューターの裏側まで見せていただいた。そこは嵐のように風が吹き荒れていた。スーパーコンピューターを冷やすための冷風だ。その冷風は、原始的な方法ではあるが、外で水をかけて冷やされたものであり、費用を抑えるための工夫が見られた。

スーパーコンピューターを見終えると、次に研究室へ戻り、免疫についてのお話を伺った。まだ高校生であることを考慮し、分かりやすい言葉で説明をしてくださった。お話の中で、まだ研究が進んでおらずわかっていない部分も多くあることがわかった。例えば痛風は、肉や卵などを多く食べてできた血栓に病原体感知システムが反応をおこし、足の親指あたりが腫れ上がってしまうものだが、なぜそれに対して反応を起こしてしまうのかは、まだわかっていないそうだ。

では、研究することは今後なくなることはないのかという質問をしたところ、「確かに生物分野においては、病原体や人は、お互いに影響しあって、進化を続けるため、研究することはつきないだろう」とおっしゃっていた。このことを共進化と呼ぶそうだ。その点で、生物学は非常に魅力的であるように感じた。

また、そのお話に続けて、進化についても、もう少し詳しく教えてくださった。その内容は、「人間の進化における最大の目的は、子孫を残すことである。だから、進化をしようかどうかは、子孫を残す前にそれに支障をきたすような体の状態になってしまうかそうでないかであり、子孫を残したあとのことは関係ないというものであった。」つまり、子孫を残すことが、一番の優先事項なのである。教授はその例として、鎌状赤血球貧血症を挙げられた。学校の授業で扱った内容だったため、よく理解できた。知識はいつどこで役に立つかわからないものである。少し脱線したが、このことを知ったので、これから生物の進化過程を考えていくなかで、理解しやすくなる部分が増えてくると思う。この他にも、研究室訪問では、多くのことを学んだ。本当に有意義な時間を過ごすことができた。医科学研究所に行き、教授の方のお話を伺えたのは、今改めて考えるとものすごいことだったのだと強く感じる。快く私達の訪問を受け入れてくださった三宅教授に感謝したい。

続いて、その日の夜に開かれた二高のOB,OGの会では、多くの東大生の方のお話をきくことができた。よく東大生はコミュニケーション能力の欠如が著しいときくが、そのような人は一部だろうと思って、実際にお話を伺うと、やはり思っていた通りだった。私達のグループは、ハンドボール部員で構成されていたため、ハンドボール部のOBの方とお話しすることが多かったのだが、どの方も積極的に話しかけてくださった。昔から現在まで来てくださる鬼のようなコーチについて語り合い、たくさん笑った。一番話のメインとなったのは、やはり勉強と部活の両立についてだった。どの方も共通しておっしゃっていたことは、ハンドボール部は、なかなか練習時間が長いので、一年生のうちから、コツコツ勉強には取り組んでいた方がいいということだった。今の自分の現状に大きな危機を感じながらも、同じ部活の先輩が、東大に入ったという事実には、励まされた。お話を伺っていると、どうもハンドボール部には、頭のよい人が集まるようで、その背景にはこの先輩方が作り上げてきた素晴らしい伝統のようなものがあるのだろうと思った。私も賢い二高ハンドボール部の一員となれるよう頑張っていきたい。

また、ハンドボール部のOB以外の方のお話も伺った。数学についての質問をいくつかさせていただいたのだが、その方は、高校時代、教科書をとにかく大切に考えられていたようだった。公式の原理であったり、基本となる問題の考え方は、応用問題を解く際に、非常に役に立つそうである。その観点からみて、教科書は非常に良くできているとおっしゃっていた。私は、数学に不安を抱えているので、参考書に先走っていた勉強法を変え、教科書を主体としていこうと考えた。現在の私の不安は、基礎力の欠如にあるのだと思う。それを改善し、この状況を打開するためにも、やり方を変える勇気を持つと思う。因みにその方は、現在折り紙サークルに所属し、数学を駆使して作品を作っているそうだ。その作品の一つである鶴を見せていただいた。どうも様子がおかしかった。鶴の上に小さな鶴がのっかっていた。一枚の折り紙で、かつ切り込みなしで作ったそうだ。折り紙の作品一つみても、東大の素晴らしさが窺える。非常に感動した。

最後に、東京大学見学について。東大につくと、まず目についたのは、警備員だった。二人ぐらい立っていた。そのうちの一人が手招きをしていた。誰を呼んでいるのだろうと思い、その警備員のほうと、自分の後ろを交互に確認した。だんだんその警備員が近づいてくる。そうか、車が来るから僕たちを端の方に寄せようとしているのか、と思い、みんなに寄るように指示したが、それでもまだ警備員は近づいてくる。その時私は気づいた。私が呼ばれているのだと。その警備員さんは、仙台出身の仙台高校レスリング部で、何かの大会で優勝したらしい。

ご自身で誇られていたので、すごい方なのだろうと思った。警備員にはイメージ通りとても力のある人が多いのかもしれない。その方は、私に、もっと二高から東大にくる人を増やして欲しいとおっしゃった。東北大学に引っぱりすぎず、もっとたくさん東大受験に挑んで欲しいそうだ。地元の人に会える喜びは大きいのだろう。警備員であり、仙台出身の方と東大でお話できるとは思っていなかった。これも何かの縁かもしれない。再びお

話ができる日を楽しみに生活していこうと思う。

ご縁を感じたあと、ついに東大内見学が始まった。この見学会で一番よかったのは、東大の雰囲気を全身で感じれたことだ。東京ではあるが、落ち着きのある静かな場所だった。木々や歴史を感じる建物の数々を見て、食堂のラーメンを食べ、幸せな時間を過ごすことができた。ふと食堂から外を見ると、ダンスの練習をしている東大生がいたりして、東大生全員が、勉強漬けの毎日を送っているわけではないことを知った。このような風に、様々なことを感じているとあっという間に時間が来てしまった。少し寂しい気持ちで東大を出ると、私は見るができなかったが、東大の番組に 2 回ほど出ていた面白い東大生に会った。きっと私の寂しい気持ちを晴らすためにやって来てくれたのだと思う。東大生は抜け目がなくてさすがだ。

先ほども書いたが、本当にあっという間に東京研修は終わってしまった。はじめ東京研修参加申込書が来たときは、迷いの念もあったが、申し込んでいて正解だったと今は自信を持って言える。そのくらい充実した 2 日間だった。「知的に楽しむ」という目的、達成できたと確信している。